丸の内同窓会会報
公孫樹

発行所
高知丸の内高校同窓会
代表　戸田　隆
〒780-0850 高知市丸ノ内2-2-40
TEL(088)873－4291
印刷　㈱高知新聞総合印刷
題字　内川　道子（丸4回生）

祝　創立百三十周年

会長　丸11回生　**戸田　隆**

今年十月一日に高知丸の内高校の創立百三十周年を迎えます。

昨年十二月に学校、ＰＴＡ、同窓会三者で実行委員会を立ち上げ、数回にわたる委員会を受け沢山の記念事業を迎えようとしています。

事業の目的は、「母校の百三十年の歴史を寿ぐと共に地域社会にもこの価値を認識していただき、さらに在校生にはこの伝統の重みを噛みしめてもらい、これを継承していただきたい」という母校発展の願いを込めた事業です。

百三十周年記念のプレ事業として今年一月に新しく同窓生名簿の発行をいたしました。この名簿をもとに、記念事業実施のための募金をお願いしましたところ、大変厳しい経済状況の中、沢山の方から募金を頂戴し、お陰様で目標額を大きく突破しており事業の実施については、いささかの懸念もなくなりました。この紙面をお借りしまして心からお礼を申し上げます。

あとは、この貴重なご浄財を有意義かつ有効に活用させていただき記念事業を推進させなければならないと思っております。会員の皆様方には、記念事業への積極的なご参加、ご協力をいただき成功に導いていただきたいと願っております。

そして母校創立百三十周年を共に祝い、喜びを分かち合いたいと思っています。

少し、記念事業の内容についてご案内をしておきます。

十月一日
13：30～記念式典（体育館）
15：30～同窓会総会（多目的教室）
18：00～祝賀会（ザ クラウンパレス新阪急高知）

十月七日
9：20～記念講演会（講師　8回生　ル・アナ中川）

十月八日
10：00～記念文化祭・丸の内同窓会美術展併催（学校アリーナ）

平成二十九年二月：百三十周年記念誌刊行予定

着任のご挨拶

事務長　**本川　博幸**

同窓会の皆さんには、いつも大変お世話になっております。

私は、この春、高知農業高校から着任して参りました本川（もとかわ）博幸と申します。

私の名前を見て、もしかするとご存知の方もいらっしゃるかもしれません。実は、私は丸の内高校に三度目の着任となっています。

一度目は、新規採用職員として本校に勤務しました。当時は大学を出たてで右も左も分からず世間知らずであったため、教職員をはじめ、同窓生の皆さんにも多大な迷惑をかけたことでした。

二度目の勤務は、採用後十二年を経て、事務職員として中堅となったときでした。その時は、北校舎の第一回目の耐震補強工事が行われるときで、同時に校舎の内部改造を行うこととなっていました。当時の事務長さんとともに、二階にあった校長室、事務室を一階に配置し直し、保健室を北校舎から南校舎へ移動するなど現在の部屋配置を決めました。

また、その翌年には学校の形が変わることになりました。女子高から男女共学に、そして、家政科が廃止され、単位制の普通科に改編されることが決定されました。当時は、単位制高校とはどのようなものかが余り知られていなくて、施設的にどのようなものが必要なのか模索をしなければなりませんでした。そのひとつとして現在の生徒昇降棟の個人ロッカー制度を提案しました。

そして今回が三度目の勤務となりました。人事異動の発表後に、今年は創立百三十周年の記念の年ということをお聞きして、前回の時と同様に丸の内高校で大きなことがある時に何かご縁があるなと感じております。

このようなことがあって、そして、この職に就いたときの初めての勤務校であったこともあって、丸の内高校に、母校のような愛着を感じております。このような気持ちを大事に今後も丸の内高校で勤務していきたいと思っております。

最後になりましたが、創立百三十周年記念事業が大盛況のうちに開催できますよう、微力ではございますが力を尽くしたいと存じますので、戸田会長さんをはじめ、同窓生の皆さんのご助力を賜りたいと思います。

★〝語りべ〟の思い出話★

第一高女54回　**松﨑　淳子**

憧れの第一高女に入学したのは昭和十四年四月。まだこの時はセーラー服、襞スカートの裾に白線一本。でも、年々戦局は厳しさを増して、銃後も大変！三年生の十二月、真珠湾攻撃から英語の授業はなし、作業は増える。

だから――修学旅行は、ナント、室戸への歩きの旅でした。それまでは、東京や日光での旅の報告会を講堂でしていたのに。

昭和十八年十一月二十五日、朝七時十五分後免駅集合。お米三合入り四日分持参のこと。後免から安芸まで電車。そこからは歩きの旅。

一泊目は田野町の旅館。二百人が寝るには、敷き布団を敷き詰め、端から一人ずつ横向きに寝て、皿鉢のおすしのように並べ、上布団をかける。友達の背中を向いて横になるけど、誰一人不満を言わない。これって、下見をされた先生方の作品なんですもの。真夜中は、私たちってどんな姿になっていたでしょうね。

三晩目だったかな。室戸の油屋という大きな旅館でのこと。食事が終わると、先生が「何か余興を」と言われました。「さぁて…」と私は考えたけど何も浮かびません。スルト。みんなの前に進み出た飯岡茂さんが歌い始めましたね。

一つ、東のお寺から　旅の話はあけるとさ　あけるとさ

二つ、不思議の鐘石を　叩けば地獄に響くとさ　響くとさ

三つ、岬の灯台は　夜の旅路を照らすとさ　照らすとさ

と、十番まで朗々と、淀みなく――。

もう私はただただ恐れ入って……へエ！わたしなんか、タマア！タマア！と叫ぶばっかりやったに。こんなスゴイ数え歌にしちゅう！と。こんな友達がいる、と思う時、私自身も「やればできるんだ」とセルフイメージが湧く感じ。

飯岡さんは、働き盛りの齢で亡くなりましたが、思い出のなかで輝いています。

×　×

私たちは満九十歳。つまり、古老ってこと。さっきしたことは忘れるけど、昔のことははっきりと思い出す。ツマリ、語りべってわけ。嫌がらずに、読んでね。

折り紙と平和

高知高女（3回生）　**川井　淑子**

昭和十九年戦争中私は高知県立高知第一高等女学校へ入学しましたが、まもなく高知県立高知第二高等女学校と合併統合し、高知県立高知高等女学校となりました。

戦争で、学校も焼けたので、昭和小、高岡小、伊野小などの教室を借りて分校生活をするようになり、級友はちりぢり分散して授業を受けました。上級生（三年生以上）は県外の軍需工場へ勤労奉仕に、私たち下級生（二年生以下）は集団疎開をし、山奥の仁淀川上流の森村の天理教で生活をし、昼間は畑で作物を作り、竹やぶを開墾したりして、それは大変な日々でした。その生活の十日目くらいの時、夏の暑い太陽の照りつける下、ラジオから流れる天皇陛下の御言葉で終戦を知らされました。集団疎開からそれぞれの家庭へ帰りました。

その後は、二部授業になり午前組と午後組に編成された授業などをしました。更に追い打ちをかけたのは南海大地震に見舞われたことです。須崎にいた私は、津波で大きな船が家屋に突っこんだり、津波に腰下までつかりながら山手の小学校に逃げました。いろいろと激動の学生時代でありました。

高知県立高知高等女学校五年生、昭和二十四年三月、私たちは最後の女学校卒業生となりました。それと同時に高校三年制にかわり友人数人は高校三年生に偏入した方もいました。卒業後は保育者になるための学校へ入学し、資格取得し児童福祉の仕事に携わりました。その目的は「児童の生命を守り育てる」という仕事でありました。定年まで情熱を注ぎ、その後も現在に至るまで二度と戦争のない平和な世界を求めささやかな活動をしています。

折り紙は保育の中で生きづいていましたが、社会教育や各種大学、専門学校、折り紙教室等の講師として依頼され、家庭教育や世界友好親善、世界折り紙展等々で訪れた国は多い。

＝地球は創作の和泉＝

わが国の折り紙指導は伝承性と復元性の一途をたどり、創作の世界へは入り込んでいなかった。子どもにやらせても子どもがいきいきと生み出す力、つまりやる子を育てていなかった。しかし一枚の紙の中には無限の点、線、面、ふくらみがあり無限の可能性をみずみずしくたたえている。創作するということは例えば花の生命の美しさに感動し、花に語りかけるときのまぶしい程の生命を輝かせてくれる。手は心のお使いであり、心に見えたものを表現してくれる。日本の祖先の生み出した世界に誇る折り紙。例えば鶴の途中から花にも、下駄にも鬼にも佛さまにも折りかえられる。自分の世界を創作したときは子どもは生きるよろこびを味わう。

＝目に見えなくても指先や心の目で見ることができる＝

シンガポールに友好と指導に行っ

たときのこと、全盲の方たちのグループに教えてほしいと依頼され、やるようになった。思いやりということは相手の立場になって近づくことであると考え、私は自分の目を閉じて指導方法を何回も何回も練習した。

＝その時がきた＝

数人の全盲の方たちの集団指導が約二時間、クリスマス用の作品、サンタクロース、星、ツリーなどいろいろと折った。皆よく折れた。全部終わったときはその中の一人が手を上げて私にあいさつをしたいとおっしゃって始まった。通訳が日本語に同時に話して発表してくださった。「日本から来たあなた。あなたは私に心で語ってくれた。私は耳をかたむけて聞いた。目の見えぬ私にはあなたの姿は見えねども、人の心は見えたのでございます」彼の目から大粒の涙がほほを伝って流れた。たくさんの拍手とシンガポールの花、オーキットの花（ランの花）の花束を抱えきれないほど私の胸いっぱい抱かせてくださった。人の心と出会うとき、距離は近くになりあたたかい心のまなざしが共有されたとき世界は一つとなり平和となる。

外国へ親善指導に行く以前は、世界は別々で遠く離れた所と思っていたが、いいえ海でつながっている。そして大空で世界中はつながっている。地球は一つなのだと思えるようになった。日本の国の祖先の生み出した折り紙の心を大切に更に創作を重ね、世界の人々と仲良くなれるよう、世界が平和になることを楽しみながら、ささやかな折り紙の「伝え人」として生き抜いている八十五歳の人生です。

丸の内高校音楽科教員による Special concert

2016・4・29㈮ 高知市文化プラザかるぽーと（小ホール）

事務局長　中内　啓二

初めての企画で入場券の売れ行きが心配されましたが、大盛況で入場できない人が多くいました。

十四時、予定どおりオーボエ／片岡絵里、ピアノ／山本芙美先生による「オーボエ協奏曲ハ長調Ｋ３１４第一楽章（モーツアルト）」で開演した。

唄、楽器の演奏等さすがに教える立場での発表会ですので、相当緊張されたのではないかと推測されます。

一番感動したのは「管打アンサンブル　日本の四季の歌遊び」のコーナーでは片岡絵里先生他七名の先生方の演奏で相当の練習を重ねてきた成果がみられ、息ぴったりで素晴らしい演奏で感動いたしました。

特に、マリンバの演奏は素晴らしかったですね。

★☆★ 母校の教壇に立って ★☆★

丸58回生　西村　結

私の学生時代は、全学年の女子が真っ黒なブレザーの制服に身を包んでいた最後の世代でした。当時私は音楽科に在籍していましたが、少人数でクラス替えもないため、家族と過ごすよりも長い時間を先生やクラスメイトと共に過ごし、音楽漬けと言っても過言でない濃い三年間を送りました。卒業後は、声楽家をめざし音楽大学に進学しました。大学では、オペラやイタリア歌曲などに触れ、さらに充実した四年間を過ごすことができました。この経験を生かし、現在は音楽科の期限付き講師として本校でお世話になっています。

現在の丸の内高校は平成十八年に普通科の単位制に伴い、男女共学となり、「夢の実現」をめざし、毎日勉強や部活動等に熱心に取り組んでいます。ソフト部、カヌー部は県体に優勝しインターハイに駒を進め、また男子の生徒が少ない中、サッカー部は二年連続、野球部は創部から初めて予選を勝ち抜き県体本戦への出場を果たしました。

一方音楽科の生徒たちに目を向けてみると、朝七時から登校し、昼休みになると一目散に練習室へ向かい、放課後は閉館するまでひたすら練習を積み重ねる生徒、会うといつも必ず笑顔で挨拶して気持ちを温かくしてくれる生徒、わからない事があると納得出来るまで何度も職員室を訪れる生徒等、どの生徒も無限の可能性を持ち、希望に満ちていると感じています。私自身そんな音楽科の生徒たちがとても誇らしく、同時に自分自身の頑張る糧となっています。

百三十周年にあたる今年の夏休みも、音楽科の先生の指導のもと、毎日合奏、合唱の練習に励み、音楽科の管弦打楽器専攻生と吹奏楽部が一緒に出場する吹奏楽コンクールにおいて、ついに初の金賞を受賞しました。また声楽、ピアノ専攻生で出場する全日本合唱コンクール、ＮＨＫ

合唱コンクールにおいても金賞を受賞し、四国大会に駒を進めることができました。

このような結果に繋がっているのも生徒の努力に加え、先生方の熱心なご指導と、協力的でいつも見守ってくださる保護者の皆様、陰ながら応援してくださる同窓会の方々など、沢山の方の支えがあるからこそだと思います。

丸の内高校に戻り、温かな素晴らしい学校であることを再認識し、愛校心が増すと共に、勤務させていただいている私は本当に幸せだと感じています。そして丸の内高校の古き良き伝統を受け継ぎ、次の世代に伝え、生徒一人一人の夢の実現を微力ながら手助けをしたいと考えています。

最後になりましたが、このような機会をいただけたことに感謝するとともに、同窓の皆様のご健康と今後益々のご発展をお祈りいたします。

つながる関東地区同窓会

丸18回生　**松岡　悦子**（旧姓：中山）

今年も六月四日（土）青山の青山荘にて恒例の丸の内高校同窓会が行われました。

参加者は七十二名。招待者六名、同窓生六十六名。1回生から卒業したばかりの若者たちまで、さまざまな年代のものが集い一昔前の様子と随分変わりました。特に1回生の吉本会長の変わらぬご尽力にはいつも感謝をしております。

また、女子高時代への働きかけや若い世代への呼びかけなど、人々が集まるきっかけを作ってくれたのは、8回生の方々の創意工夫が出発かもしれません。それが今もずっと引き継がれて、関東地区同窓会の継続と発展につながっている、そのように思います。種が蒔かれるといろいろなものが自然に芽生えてきます。そして目に見えるものへと伸びていきます。

タンゴの北島ひとみさん、小笠原八重先生の独唱、プロの堀江真美さんのコンサートと続いた音楽イベントの後は、このところ3年連続で記念講演をお願いしてきました。最初は9回生の谷是さん、二度目は6回生で大阪在住の木津川計さん、そして今年は9回生の西村真さんでした。歴史家、芸能の研究家、作家と、毎年素晴らしい先輩のお話が伺えて、参加者からも好評になっています。発掘者の方がいるからこそですが、これこそ有意義な同窓会といえるのではないかと思っています。さらに谷さん、木津川さんについては新たな活動が話題になり掲載新聞記事や催し物のお知らせで皆様にチラシを同封いたしました。

今年の記念講演は、「東京初代の生き方」というテーマでした。

若かりし頃、単身高知から東京に出てきて、身も知らぬ大勢の人のいる大都会で、つながりのある人と出会い仕事をし、自分のスタンスを見つけてどうにかここまでやってきたという生き様…参加者のほとんど全員の気持ちと重なって、とても感慨深い講演でした。出版された本『東京哀歌』にサインまでいただいて、後でじっくり読ませていただきましたが、現代の若者にも共感できるいい作品だと思いました。同窓会のときはご本人と話ができなかったので、ミニ同窓会でも開いて「西村さんとお話しする会」を持つのもいいかな、などと身近な方々と話しています。

またもう一つの目玉は、プログラム第二部、第三部の交流です。

特に第二部は、毎年誰かが何かを企画してくれます。今年は、20回の小嶋啓子さんと26回の植松美壽恵さんのお二人でした。二人とも単なる出席者として参加していたのですが、会場の雰囲気に押されてか前々からの準備もあってなのか、突然催しに「やります!!」と手を挙げて現れたような、同窓会の産物のような方々です。

植松さんは、高知の実家の片づけをしていたら立派な刀が現れたことと、どういうわけか小さいときガマガエルに牛肉をあげたことを思い出して、ガマの油売りをしたくなったとか。男になろうか女のままでええろうか、などと相談されました。とにかくなんでも芸能にしてしまう彼女の才能は、今や関東地区同窓会に欠かせません。

「ルアナと楽しい仲間たち」

ハワイの由緒あるクムフラが伝える
「アロハ ルアナ フラ」を受け継いでいます。
いつでも、どこでもを選べます。

グループ代表 ルアナ中川（丸の内８回生）
TEL088－822－6778

カフェ・ドゥ・リーブル

芳ばしいコーヒーの香りと溶けあいながら、ゆるやかに流れていく時間。午後の日だまりにも似た優しいなごみのひとときを、心ゆくまでお過ごしください。ていねいにドリップしたコーヒーと手づくりの料理とデザートが、いつでもお待ちしています。

高知市文化プラザかるぽーと3F　川島　美代
TEL 088-882-7750　（丸の内8回生）

小嶋さんはご本人の掲載記事もありますのでお読みいただくとして、三年前の同窓会で突然手品をやりだして予定外のことでアラー!!という気持ちでしたが、それがまたぴったりのはまりようで、「アッ、ヤッター!!」という気持ちになったのを覚えています。

このような催しが企画できるのは前段階からもうすでに交流ができていて終わってからもずっと続いていることがあります。17回の太田節子さんのシャンソンコンサートへの応援もそれで、これも石本さんが手記を寄せてくださっています。これ以外にもいつの間にかいろいろなつながりができていて、同窓の輪が広がり放題広がって書ききれないくらいです。

今年は学校創立百三十周年の記念式典もありますが、新たに編纂された名簿によって関東地区でも数多くの方々を発掘することができ、また六十三名もの関東在住者の住所が判明しました。いつも名簿のメンテナンスをしてくださっている、14回の小松さんには頭が下がります。引き継いでまたどなたかがなさってくださることと思いますが、六百三十名もの名簿は今までの人たちの積み重ねた、それこそ同窓会の宝物です。

同窓会の主人公でもある参加者を、今年は特にいろいろ私のわかる範囲でお話を交えて紹介しました。招待された新卒の方々からは、今どうしているのかこれからどうしたいのかなどを話していただきました。先輩たちがほほえましく見つめていたのが印象的でした。

同窓会会長・戸田さんの『四万十川』熱唱（８回生の女性とのデュエットとなりましたが）、大学院生の野町知宏君（61回生）の「オ・ソレ・ミオ」の独唱。丸の内の同窓会には毎回歌が大切なアイテムになっています。そして最後の校歌斉唱。皆さんの気持ちが最高に盛り上がったかのような合唱でしたが、それに負けまいと体全体で一生懸命指揮してくださった12回の横川浩憲さんが印象的でした。

10回生の山崎さんが毎年してくださっていましたが、今は亡き人となりました。ご冥福をお祈りします。

多士済々の〝いごっそう〟〝はちきん〟のつながりは健在です。

これからも皆が自然につながっていきそうな予感のする丸の内の同窓会です。

（東京都板橋区在住）

なかまの 本 ―― 同窓生書籍の寄贈紹介

歌集「花開く蓮」　Ａ５判　240頁

昭和35年卒（11回生）　山崎波浪（埼玉県在住）
平成27年８月18日高知歌人社から出版
平成28年２月第60回高知県出版文化賞受賞
著者は、高知市出身で現在は埼玉県坂戸市に在住。平成７年病気により視力障碍のため失明、ほぼ失った視力で四季折々の風物や生活の風景、社会事象を〝心の目〟で捉え情感豊かに詠んだ歌集

自分史「昭和生まれのモッチャンです」　Ｂ５判　187頁

昭和23年卒（併設中学校第１回）　矢野元子（旧姓間崎・春野町）83歳
昨年、戦後70年の節目に、人生の半分（独身時代）の自分史を出版。
戦争中言葉も知らない世代の人々に、矢野さんたち世代が受けた教育や言葉を伝える「いのち」と自覚し、そのひとつの形としてまとめたもの。

同窓会幹事の代行承ります。
〔案内状の作成・宛名書き・発送等を当方で承ります。〕
幹事さんの負担を軽減！
訪れやすいので喜ばれます。
各種集会・懇親会・展示会・婚礼・宴会
集いのプラザ　高知商工会館
〒780-0870 高知市本町1-6-24　TEL088-875-1171

高野山真言宗　観音寺
住職　東野信浄（ひがしのしんじょう）（丸の内８回生）
〒780-8022　高知市孕西町272-1
ＴＥＬ　０８８－８３２－５８９１
ＦＡＸ　０８８－８３２－５８５２

高知丸の内高校　関東地区同窓会
～つなげよう　同窓の絆～

2016年６月４日（土）
@NHK青山荘

関東地区同窓会2016：スナップショット集

〝母校130周年を寿ぐ〟と銘打った今年の関東大会。久しぶりに同窓生に会う楽しさ、毎回一工夫ある記念の催しと絆づくりイベント多々。今年も初代1回生から新卒67回生まで大集合。「絆づくりホルモン：オキシトシン」出っぱなしの〝関東丸の内家のおきゃく風景〟です。

● 作家・元編集者の西村真さんが語る「東京初代の生き方」のサイン入り小説「東京哀歌」は完売、全額を「130周年募金箱」へ。

● 〝ボケモンGo!〟にならないための秘訣、それは〝マジック〟です！来賓を手玉にとるマジシャン小嶋しゃん。

● 今年のおもてなしイベントは、「土佐弁で騙る：ガマの油売り」演者はご存じ、レクリエーション介護師の植松美壽恵の丈。

● 関東丸の内家の新きずなソング「四万十川」をバックに募金箱が巡回。慌てて財布をまさぐる面々。

● 〝来たれ、若人、関東へ。　若手の決意表明に拍手の先輩たち。

同窓会・集合写真撮影承ります。
（高知市文化協会会員）
フリーカメラマン
写真の　近藤
近藤泰清（丸の内16回生）
〒780-8081　高知市若草町3-2-302
携帯TEL　090-2784-4235

株式会社 高知新聞総合印刷
〒781-8121 高知市葛島一丁目10-70
TEL(088)882-5521　FAX(088)882-5522

同窓会誌「公孫樹」と
―関東同窓会

丸8回生　関東同窓会世話人
田中　公夫

〝母校百三十周年〟も間近かになった数年前から、同窓会を準備する度に私を含め新制高の男女共学時代生も早晩、絶滅危惧の徴候あり、と痛感。これではイカン！先ずは、魁より・会よりの記録を、と蒐集を始めました。ある程度、関係資料※が集まったので、以下、創設の経緯を辿りつつ、世話人の一人として、これからの関東同窓会の在り様への想いを綴ります。

≪皆さん、「会報創刊号は名無し」だったことを知っていますか…≫

時は一九七二（昭和四十七）年十一月、『生まれたばかりの会報で、名前がありません。名前をつけてください。』関東同窓会誌の創刊巻頭言です。関東在住の新制高卒業生は三百名を数え、日本は高度経済成長期とあって、年令は三十から四十歳代の働き盛り（出稼ぎ組？）。しかし、経済成長期はピークを過ぎようとし、故郷・地元では社会経済状況や、母校をめぐる修学状況も激変しつつあり、関東進出者の減少傾向は始まり初め。

母校の女子高化は既に一九六七（昭和四十二）年から（二〇〇五（平成十七）年までの三十八年間）。先んずる名門県立高女の同窓会：藤蔭会は関東でも意気軒昂。参加二百名の内「黒一点」だったと出席の丸5回生による寄稿もあり、といった状況。次の年には関東にも高知産の「一本の公孫樹を育てよう」と参集者百八名、と記録されています。将に〝東京初代／関東一世〟の意気躍如です。

会は十五、六年後、初代大和田会長や次の片岡会長の帰郷などもあり、平成元年（一九八九）二月には母校百周年式典。直後に本部会長の小笹氏が亡くなり、後任は大和田会長に、（続いて澤田会長、現在の戸田会長に、）となります。

≪そして関東版「公孫樹」は16号をもって終刊（一九八九・十一）、本部統合版「公孫樹」発刊は翌・平成二（一九九〇）年九月から…≫

こうした経緯もあり、本誌へは毎号、数人が寄稿（延べ四十四編）。また、関東全体会は卒期ごとの幹事方式でほぼ毎年開催。（但し、卒期幹事団の引き継ぎ難で九年の休会の後、母校の再度男女共学化（平成十七（二〇〇五）年～）もあり、再開は平成十八（二〇〇六）年。）

現行の世話人会方式は平成二十二（二〇一〇）年、会報二十号で8回生・能勢ドクターによる〝同窓会、まだ続けるの〟でキックオフ。新コンセプト『つなげよう、同窓の絆』のもとに世話人は女子高時代生も加え、記念イベント&オモテナシ懇親プログラムを恒例化。風評と口コミ狙いで「会報には関東特集：写真入り記事」を掲載、というスタイルを継続し、現在に至っています。

≪関東版「公孫樹」の蒐集余話を…≫

私ごとですが、片岡事務局長（創設時代の本部会長の一人、後の関東会長・一九八九年歿）による関東十周年記念号（一九八二・十）の懐古記に、創立準備会のメンバーに小生の名と会場・NHK青山荘とあり、少しは関係していたらしい。しかし、当時は身辺多忙で特段の記憶はありません。

三年前（平成二十五年：二〇一三）には、1回生から10回生まで担当された関東の顧問格の小笠原八重先生が亡くなったこともあり、現役で活躍中の1回生の吉本先輩を関東会長に頼み、前述のとおり旧共学時代生の減少に歯止めし、女子高時代生の参加増加を意図することに。そして、先ずは、関東在住者の先輩、同期生から基礎資料の蒐集と保存を呼びかけようと、会スタート当時の副会長であった6回生の竹村先輩と同期8回生の日和崎氏に相談。両氏からは関東版公孫樹十六号中の十号分を入手、あとの六号分は元会長の5回生の池神さんに聞いてみたら…という。

先輩曰く、『しもうた、最近整理したところ。探すなら今！一に「しっかり者」、二に「在職中、転勤転居が少ない者」、三に「大きな家に住んでいる」、そして五は「これから長生きする心算の人じゃ」、とのご託宣。～そんな人はおらん、ぞね～、ということで会報で広く周知（二〇一四・十）。

そして1回生の花谷さん、8回生の根井さんからの提供で、あと四号という段階で、凄い助け舟が登場！一人は、故郷南国市に帰郷中の4回生の小松孝寿さん。最後のトリは、何と神戸市にお住まいの2回生の須藤淳さんから。復活した関西同窓会（二〇一五・八）に参加、席上配布の会報で関東版の蒐集を知り、一～十四号までの原本を寄贈いただき、完本二セット完了！先日、一セットを「百三十周年事業実行委員会」に寄贈したという次第です。

≪今後、首都圏の人口は集中、高齢化が昂進する。関東丸の内家の在り様は如何に…≫

しかし悲観することはない、数は少なくても青春時代を共に過ごした同期生の集いは逢う度に楽しいもの。そして、この数年で広がり深まった卒期を越えた絆が繋がれば、益々愉快で有意義な交流はありうべし。何ら、従来パターンを踏襲する必要はない。今に生きる心の故郷の在り様は多様！百三十周年を好機とし、〝無理なく、楽しく、そして時にはサムシングニュー〟も、出来ることからやってみませんか、という思いを込めたい。このためのステップとして今年の全体会は〝ランチ&

ティーパーティー方式〟とし、加えて繰越金と関係書籍の在庫一掃で「関東同窓会百三十周年寄付十五万円」を捻出しました。これによりオールリセット、来年以降は会のやり様も抜本的に皆で捻り出すことに～～。関係の皆さんのお知恵と支援をお願いする所以です。

丸の内高校 関東同窓会の経緯～関東版と本部統合版「公孫樹」からの記述による～〔詳細は一部不明〕

年代・概要	関東の経緯	本部の経緯	備考
1950：昭25・１回生卒		同窓会の結成はいつか、 会長、事務局長は…（要調査）	
		1958：昭33・新旧同窓会の統合問題 会長：片岡照博②による高女会合併交渉の経緯あり ＜片岡氏ほどなく上京＞	
1964：昭42・女子高化			
	1972：昭47・７・15　関東同窓会発足 会長：大和田昌弘①、局長：片岡照博② 公孫樹１号：1972. 11. 2 公孫樹２号：1973. 10. 5 公孫樹３号：1974. 10. 25 公孫樹４号：1975. ９. 20 公孫樹５号：1976. 10. 20 公孫樹６号：1977. 11. 11 公孫樹７号：1978. 12. 9 公孫樹８号：1979. 11. 5 公孫樹９号：1980. 11. 10 公孫樹10号：1981. ９. 15 公孫樹11号：1982. 10. 10 1982：昭57・11・13　会長：片岡照博② ＜1982. 11大和田会長帰高＞ 公孫樹12号：1983. ９. 10 公孫樹13号：1984. 10. 1 公孫樹14号：1985. ９. 10		本部版「公孫樹」の各１～19号は関東在住個人寄稿掲載
1986：昭61「100周年」	公孫樹15号：1987. 11. 20 ＜1989. ××片岡会長転出＞ 1989：平1. ××　会長：安岡明夫③ 公孫樹16号：1989. 11. 15　＜終刊＞ 【片岡前会長　1990. 6. 2逝去】	1989：平1. 2. 18「100周年記念事業」 同窓会再建：会長・小笹雄弘【1989. 4. 3逝去】 式典：関東片岡会長列席 1989：平１・会長：大和田昌弘①	
1996：平８「110周年」	1992：平4. 3. 6　会長：安藤堅一④ この間の会長は、池神重明⑤、藤岡暉生⑥ 〔1998：平成10～2005：平成17の間〕 ≪関東同窓会は休会≫	「公孫樹」創刊1991：平2. 9. 1 1999：平11. 10. 2　会長：澤田輝夫⑤	
2005：平17・共学化 2006：平18「120周年」	〔2006：平成18から再開 会長は藤岡⑥、横田俊雄⑦ ～2010：平成22〕 〔2011以降、世話人会方式で開催、 現会長は、吉本宏①〕 会報20号「関東特集」：2010. 12. 10 会報21号「関東特集」：2011. 12. 1 会報22号「関東特集」：2012. 12. 1 会報23号「関東特集」：2013. 12. 1 会報24号「関東特集」：2014. 10. 1 会報25号「関東特集」：2015. 10. 1	2007：平19. 10. 6「120周年記念事業」 2013：平25. 10. 5　会長：戸田　隆⑪ 公孫樹「25号」　2015：平27. 10. 3	
2016：平28「130周年」		2016：平28. 10. 1「130周年記念事業」	

≪調子に乗って、現代の土佐浪士・植木枝盛ばりに建議〟…≫

最近、関東で話題になったことですが、高知県東京事務所で六月二十五日開催の土佐史談会の研究発表会には、９回生の谷是さんが上京、講演。面白くて、成る程と感服したのは、手紙などの古文書を渉猟しエピソード多々、かつ巧みな訴求ポイントの工夫でした。会には関東の同窓生数人の特別聴講もあり大盛況。それに気をよくし、百三十周年がチャンスとばかり、母校と同窓会本部に向け、こんな提言をしますが如何でしょうか！

一つは、母校開設の契機となり、また今日的意義もある自由民権家の植木枝盛の建議を記念誌や校内に止まらず、広く周知すること。

二つ目は、関係者が少なくなりつつある今こそ、本部同窓会の創設時を含めた推進体制や事業内容を記録に留めること。

今後、公立校の統廃合も必至の状況を踏まえ、先ずは足固めをしっかりしてほしい。そして、関東、首都圏に在住の卒業生の絆づくりと母校への貢献は如何に、と模索したいと念じます！

（神奈川県相模原市在住）

※「蛍雪八十年」丸の内高校同窓会・吉永豊美校長著（昭和42：1967・２）
「創立百周年記念誌：公孫樹」（昭和63：1988・９）
「創立100周年記念事業報告書」実行委員会刊（平成元：1989・５）
「創立120周年記念誌」実行委員会編（平成20：2008・３）
「関東版公孫樹誌：１～16号（1972～1989）」
「本部統合版公孫樹誌：１～25号（1990～2015）」
「同窓会名簿：昭和31年版（1956）」
「会員名簿：平成19年（2007）2008・１」
「会員名簿：平成28年（2016）2016・１」
「関東支部会員名簿：昭和56：1981・１」
「関東支部会員名簿：平成元年：1989・11」

☆☆**次回、来年の関東地区同窓会については、下記あて問い合わせ下さい！**☆
世話人の田中公夫：℡ 042（746）8123／ケイタイ080－5535－8858
〃　松岡悦子：℡ 03（6780）2335／ケイタイ090－9323－1920

土佐の高知の丸の内

丸５回生　**岡井　盛夫**

昔、勤務先（横浜市Ｋ社）の後輩から「丸の内高校とは」、と問われました。「母校は、高知城の丸の内にある。ルーツは、明治二十年の高知県尋常中学校女子部に遡る。その後、県立第一高等女学校時代、作家の宮尾登美子さんが入学を切望したことがあった。しかし、父親の職業（女衒）のことで、入学を断念せざるをえなかった。かくのごとく、母校は厳格にして伝統ある女学校であった。但し、私は女子ではない。戦後の高校再編成によって男女共学となり、５回生の男子として卒業した」、と答えたことがあります。

【注】昭和二十六年四月、高知県立普通高校への入学は無試験であった。但し、各自の志望校は無視されて追手前・小津・丸の内の高校に、それぞれ振り分けられた。私は、無試験であったことを引け目に思って

いた。中年になって、各分野で活躍する同窓生達を知るに及び（※）、その多士済々を誇りに思うようになった。老年になって、５回生全員の個性を等しく敬愛している。

※まことに多才で、優秀な同窓生が少なくない。但し、私のような凡人もいなくはない。

今年の四月、関東同窓会の開催案内状を受け取りました。その文面に「担当世話人」として、代表・田中公夫さん（８回生）、副代表・松岡悦子さん（18回生）、会員管理・小松正一さん（14回生）の三人のメールアドレスが載っていました。五月、三人宛てにメールを送りました。私のホームページ（ＨＰ）に、５回生（※）の俳句を掲載していたからです。折り返し、返事がありました。

※季刊俳誌「遊」の同人、橋本幸明（本名穆明）さん、下元永博さん、森本公子（旧姓和田）さん。

この文章のタイトルは、三人の「世話人」とのご縁があって思いつきました。つまり、私のＨＰ（※）にタイトルと同名のコラムを新設することになりました（八月からスタート）

※ http://buntan.la.coocan.jp/

私は、一部の５回生宛てに冊子（リハビリ自分史）や「まるまる通信」なるものを郵送したことがあります。それら郵便物の一部をネット版にして、上記三人の役員にもご案内することにしました。更に、コラムには別の目的があります。このコラムを丸の内高校同窓生が自由に使って、「交遊広場」になることも願望しています。但し、私は高齢者（81歳）です。いつ何時、くたばるかもしれません。その時は、ＨＰもコラムも終（おわり）です。

この春まで、私は母校の開校百三十周年について無関心でした。その私が、無関心でいられなくなりました。上記役員は百三十周年記念行事に関わっておりますから、私のメールを「飛んで火に入る夏の虫」のように思ったのかもしれません。会報『公孫樹』への投稿を勧められました。

しかし、私ごときものが百三十周年記念行事に関わるつもりはありませんでした。ところが、母校の百三十年史にフェロモンのようなものを感じたのです。但し、フェロモンは人間の臭覚では感じることはできません。何ともミステリアスなことです。

フェロモンとは、例えば、ミツバチが体内で生成したものを体外に分泌している生理活性物質です。ミツバチのフェロモンは、彼らのコロニー（生物集団）のコミュニケーションとして使われていますが、彼らが生物的同種であることを共感する本能でもあります。

私は人間の意識ではなくて生物的本能で、会報「母校創立百三十周年記念号」（実質、伝統ある女の歴史）の分泌フェロモンに、誘い込まれていました。その結末が、この原稿です。

【ご案内】左記は、小松英星さん（５回生）のホームページアドレスです。

http://gaia-as.universe5.com/

（横浜市金沢区在住）

夏至

丸11回生　**山崎　波浪**

連続地震災害からそれほど間のない
九州に
空の底が抜けたような大雨
山や崖が崩れ死者も数人
北のショッピングモールでは
男が包丁で女性四人を殺傷し
死刑になりたくてやったと言う
また東京の最低知事がむっつり退職
ボーナスも含め六千万円ほどを
しっかり手にするらしい
知事を批判していた都議達がぞろりと
リオ五輪へ大名旅行するとのニュースも
ラジオのチャンネルを替えると
早口で人間味の感じられない総理が
しきりに自画自賛している
夕方ほっと寛いでいたら
ふるさと高知のまったく知らない後
輩から
埼玉の某候補を是非ともよろしくと
電話
何だか気疲れする一日だなあ
古いジャズでも少し聴いてさっさと
寝よう
そう言えば今日は夏至だった

（埼玉県坂戸市在住）

●関東地区同窓会に初めて出席して●

丸19回生　**南雲　和枝（旧姓：福留）**

私は卒業と同時に東京の出版社に就職のため上京し、現在は千葉県に住んで居ります。

「関東地区同窓会」の事は、以前、世話人の田中様から送られてきました同窓会会報『公孫樹』第25号で初めて知りました。

当時は関東方面に進学・就職する人は少なかったようで、私の知る限りではいませんでした。今回ご案内をいただき、もしかしたらどなたか知った方にお逢いできるのでは…という期待があって出席しました。しかし、その期待は見事に裏切られましたが、多勢の同窓生がいらっしゃることを知り大変嬉しく思いました。

これからも自分が生まれ育った「高知と丸の内高校」の空気を感じながら、楽しく過ごせる時間を共有できる場であってほしいと思います。効果のほどはわかりませんが、何人かの円卓で茶話会のような形式で会話をしやすくする当日の雰囲気作りが功を成していたように思います。

世話人の皆さま、お疲れ様でした。ありがとうございました。

（千葉県市川市在住）

わたしとマジック

丸20回生　小嶋　啓子
（旧姓：中田）

今から六年前、横浜市南区の社会福祉協議会の「マジック講習会五回コース」の募集がありました。これだ、と思いすぐに申し込みをしました。

その頃、私は介護老人保健施設で介護の仕事をしていました。

月一回の誕生日会は、いつも歌ばかりでもっと楽しいこと喜んでもらえることはないかなと考え、マジックの本で覚えた簡単なマジックをやらせてもらっていました。しかしネタも少なく自分のレパートリーの狭さを痛感していました。何とかレパートリーを広げる方法はないものかしら？

そんな矢先、講習会のお知らせに出合ったというわけです。これはチャンスだと思いすぐ参加申し込みをいたしました。

ところが、五回のコースが終わると、もっとやりたいという気持ちと続けたいという気持ちが重なって、仲間が自然にできてきました。今度は「南区マジック楽しい会」というサークルを作り、月二回（一回目は先生の指導で、二回目は自主練習で）マジックを楽しんでいました。そして一年後には「南区ボランティア連絡会」に加入し、五十代、六十代、七十代の十五名のメンバーとなりました。活動も増えていき、地域の祭りやデイサービス、サロン会（老人会の月一回の食事会）などから声がかかり、マジックを楽しんでいただけるようになりました。そして何より私たちも一緒に楽しんでいることです。

また、一人で頑張って生活していた九十二歳の義母が四月からグループホームに入居することとなりましたが、私はすぐボランティア登録をし、月一回、おしゃべりをしたりマジックをしたりと楽しんでいます。

これからも、自分はもちろん、子供たちや高齢の方々に笑顔でいていただけるよう心から楽しんでいただけるよう、マジックを通してボランティア活動を続けていきたいと思っています。

今回、丸の内高校関東地区同窓会でマジックをご披露することになり、緊張感でいっぱいでしたが、何とかきり抜けられてほっとするとともにいい仲間との出会いに感謝する気持ちでいっぱいです。

（横浜市南区在住）

四度の同窓会に参加して

丸20回生　石本　佳世
（旧姓：近沢）

今年は母校の百三十周年記念という年に当たり誠に喜ばしくお慶び申し上げます。

私が同窓会に参会し始め今年で四度目となりました。

六月四日の表参道・ＮＨＫ青山荘での同窓会も代表の田中さん、副代表の松岡さんはじめ多くの同窓生のお陰で無事世話役を務めることが出来ました。ありがとうございました。

同窓会より二週間後には田中さんの掛け声の下、総勢七名で先輩の太田節子さんのシャンソンコンサートに応援に出かけました。

昨年の同窓会でその歌声は披露されましたが、実際の会場ではその雰囲気に似合った照明と華麗なドレスに身を包んで生演奏バックに主人公の心情を切々と熱唱する姿に引き込まれ心を揺さぶられました。

人生の重さを感じる年齢になりシャンソンの持つ魅力に更に囚われ、その余韻をいつまでも忘れることが出来ません。

初めての同窓会に出席した四年前には偶然隣り合わせ長野から来られていた先輩とお話をさせて頂き、その一年後には世話役を通して親しくなった女性四名と厚かましくも遠路、茅野まで訪ねて行きました。しかも同じ世話役でその長野の先輩とは朋友の間柄という横川さんに案内役まで引き受けてもらい、皆様には散々お世話になりました。

茅野のお住まいにまでお邪魔させてもらい、安芸出身の奥様も共に歓待して下さりご夫婦の誠実で優しいお心遣いに大変恐縮しました。

丸一日長野の清澄な空気の

飯田正税理士事務所
（四国税理士会
高知支部所属・81729号）
税理士　飯田　正（丸の内6回生）
〒781-8104 高知市高須1-4-23
☎(088)885−3150

CHRES
サンピア セリーズ
すべてのひとのすべてのそばに…
サンピア セリーズは笑顔でお待ちしています
〒781-8101　高知市高須砂地155
TEL 088-866-7000　URL　WWW.chres.jp
fax　088-866-7017　E-mail　info@.chres.jp
吉村　和子（丸の内５回生）

中、美しい八ヶ岳、南アルプスの広大な景色を目に焼き付け、先輩方との交流を深く心に刻んだ一日となりました。また、今年は昨年初めて参会された横浜のご夫婦とも親交を深めることができ、まるで高知に住んでいるような土佐ワールドにどっぷり浸れる心地良さを毎回楽しみにしております。

三月には20回生を中心に「乙女の会」(これはかなり無理のある名称ですが…笑)を結成、四月十一日には総勢八名が鎌倉に集まりその交流を楽しみました。

同窓会のお手伝いをさせて頂いたご縁で今まで知り得なかった方々との交流が生まれ、この年齢になって更にこんな幸せを感じられる時間を持てることを感謝しております。

共有するアイデンティティーがあるということはすぐに距離を縮め、そこに安心感をもたらしてくれました。同窓生に接しつくづく感じるのは、皆青年の瑞々しい感性を失うことなく持ち続け人生を豊かに生きていること。私も感化されてゆきたいと思います。

毎年このような盛況な会に大きく導いてくれた諸先輩はじめ、田中さん、松岡さん、横川さん、小松さん、中山さん、二川さん、小林さん、榎本さん、そして皆様のご尽力に改めて深く感謝致します。

最後に母校の未来永劫の発展を心からお祈り致します。

（神奈川県大和市在住）

関東同窓会に参加して

丸64回生　**山本　晃平**

大学二年生から参加しており、今回で三回目の参加となりました。毎年、幅広い世代の先輩方にお会いすることができ、普段大人の方々とあまり接する機会がない大学生である私にとって、とても刺激的な時間を過ごさせていただいています。

先輩方のお仕事の話、共学になって以降の卒業生との交流は高知から東京に出てきた私にとって安心感が生まれ、大学生活、就職活動、これからの東京での生活での活力になっています。

私は祖母、母と三代で高知丸の内高校のお世話になっています。入学するきっかけになったのも、第一高女時代から丸の内高校女子高時代までの話を家族から聞き、日本史が好きであり、明治時代から伝統があるという点に惹かれて入学しました。

在学中から関東同窓会に出席して、丸の内高校には県内他校に無い、縦横の繋がり、先輩後輩間の温かさと強い絆があると感じています。

今回の同窓会に参加して、そのことを強く思いました。現在、大学四年生で就職活動をしており、やりたい仕事が見つかり、その仕事に就く為に毎日活動しています。その時に参加した同窓会でお会いした先輩の知り合いに私が目指している業界の最前線で活躍されている方がいらっしゃり、紹介していただきました。

困っていれば、近くにいる先輩方に助けていただくことが出来る、という環境と伝統をこれからも繋げていきたいと改めて感じました。その為にも共学になって以降卒業した方々をより多く誘い、同窓会の輪をこれからも広げていきたいです。

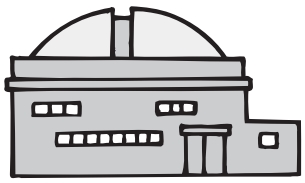
参加する度に、共学になって以降の卒業生の参加数が増えていることに喜びを感じています。今回は今年度卒業した後輩たちが六人も参加してくれて、今後一層参加者を増やす良いきっかけになったと嬉しく思います。更に今年は初めて私と同期生の方が参加し、私たちの代の輪を更に広げ、関東同窓会をこれから引っ張っていく世代になりたいと思いました。

（東京都多摩市在住）

丸関西会　盛会（Ⅱ）

関西同窓会支部長
丸3回生　**杉本　泰男**

今年の八月七日（日曜日）に、再興された第二回丸の内高校関西支部総会・懇親会が、ＪＲ大阪駅のホテルグランヴィア大阪の孔雀の間で、三十三名参集していただき、賑やかに楽しく開催されました。昨年は五十名程集まりましたが、今年は特に暑い中でよく来てくださったと感謝しています。１回生一名、２回生一名、３回生四名、８回生五名、９回生一名、11回生十名、12回生三名で男性十五名、女性十四名の関西地区の同窓生です。それに昨年に続く織田敦子校長、戸田隆同窓会長（11回生）、中内啓二同窓会事務局長（12回生）に今年は特



☆長唄とお囃子の発表会☆
日時：平成28年11月20日　11時開演予定
場所：土佐御苑　入場無料　お気軽にどうぞ！！
口上・がまの油売り　植松　美寿恵（丸26回生）
高知市下島町　TEL 080-6888-5570

に創立百三十周年記念だからと高知県大阪事務所の久保誠次長にご臨席いただきました。

さて、支部総会での私とご来賓の挨拶とお話に諸行事の案内がありましたので、ここにまとめました。

1　今年は母校創立百三十周年記念式典と同窓会総会と祝賀会が十月一日（土曜日）に開催されます。私も帰省して出席します。織田校長より皆に最新の学校案内をいただきました。

2　関西でのふるさととの交流行事として、十月二十三日（日曜日）に大阪新阪急ホテルにて、その交流会が開催されます。昨年は三百名程集まりました。次に十一月十五日（火曜日）に京都霊山護国神社にて坂本龍馬・中岡慎太郎の墓前祭が斎行されます。全国から数千人のファンが集まります。両日とも我が高知県の観光と物産のポジティブなトップセールスマンの尾﨑正直知事のご臨席をお願いしています。

3　来年平成二十九年は、大政奉還百五十年、翌平成三十年は明治維新百五十年に当たります。「リョーマの休日」として歴史を訪ねて美味しいを知る観光キャンペーンを高知県下一帯で行います。多くの人々に高知を知っていただき、訪ねてほしく思います。

総会の最後に私からひとつ議案を提出しました。来年の第三回総会を支部長の選任年として、その候補者を自薦他薦を問わず来年一月末までに私なり世話人に申し出ていただきたい。それを私共役員で推薦して総会で選任してもらう事としました。

そして各学年毎の世話人か連絡係でも申し出てください。また16回生以降の同窓生も関西支部総会懇親会に参加していただきたく思います。皆さん勧誘してください。

さて次は、戸田会長の乾杯の音頭で懇親会となりました。ホテルのお料理は、冷たいもの温かいものの和風の上品なメニューで年配の私共には、とても食べやすいものではなかったでしょうか。それをビールとかワインか焼酎か烏龍茶を飲みながらのおしゃべりで、あっという間に時間が経過しました。そして余興と昨年好評だった12回生の森田登記さんが南京玉すだれを猿面の顔立ちで唐草模様の衣裳で披露してくれました。続いて私の友人安岡明夫画伯の六号の「室戸岬」を負けるが勝ちのジャンケン大会で競り落とすこととなりそれに勝った？私の友人の垣本政幸君が、織田校長にプレゼントすることとなり、校長室へ掲示されることとなりました。めでたしめでたしです。

続いて、お待ちかね12回生中内事務局長の歌謡舞踊です。大月みやこの唄「白い海峡」のメロディーに乗って色々な科（しな）をつくって、全テーブルをゆっくり廻って行きました。昨年はその悩ましい実演は、時間切れで残念でほっとしたのですが、今年は期待以上のものでした。

それから皆で歌いましょうと、歌える人、歌う人がステージへ上がりました。「誰か故郷を思わざる」「南国土佐を後にして」は、いつ聞いても歌ってもいいですね。そして11回生のコーラス部を中心に十数人がステージへ上がり丸の内高の校歌を斉唱しました。きれいな涼しい声でした。半世紀を飛んでいったようでした。

これでお開きとなりました。先ず集合記念写真撮影をして開会から閉会までの三時間の司会進行は、正に代表世話人の坂本周一さん（8回生）の独壇場でした。素晴らしかったです。あと三人の世話人11回生の三嶋香代さん、12回生の佐々木朋子さん同じく長沢義喜さんも皆さん自分の

「南国土佐を後にして」を歌う皆さん

高知から持ってきた校名幕をバックに
戸田同窓会長を囲む美女プラスα

持ち味を活かして、勧誘・交渉・準備の手配から当日の受け付け・撮影・会場の雰囲気づくりから会計等大変よくできて、お世話様でした。坂本代表と三人の世話人に乗っかっていた支部長として厚く御礼を申し上げます。来年もよろしくお願いいたします。

そして高知からの校長先生、会長、事務局長さん、今年もおみやげ付きでありがとうございます。ミレービスケットとけんぴのセットを全員にいただきました。

最後に本日ご参加くださった我が丸の内高校の同窓の皆さん、この暑い中、ようこそお越しくださいました。来年もお待ち申し上げます。お友達にも楽しかったよとＰＲしてください。今年は特に暑く熱中症が心配されます。どうぞ皆さんお気を付けてお元気で。

写真撮影と配送は坂本周一さん、佐々木朋子さん、長沢義喜さんです。

平成二十八年八月作成

関西同窓会へのお問い合わせ、申し込みは杉本泰男までどうぞ。

（TEL・FAX）０７７―５６１―７２５８

（携帯）０９０―８７９３―１０９５

「君恋し」を歌う丸１回生岡本収司さん、校長室への「室戸岬」の６号絵

啓蒙と自覚　桂浜へどうぞ

―京都宇治にて―　杉本　泰男

水平線には　いけども　いけども
そのふくらむ彼方へ届かないものです
僕達の自然は　太陽の周りを　朝から昼へ
昼から夜へと　そして翌日の朝へと時を重ね
さらに　お月さんを伴い　春夏秋冬へと
四季に移ろい乍ら　そのひと周りを
年々くりかえしています
それで　僕は届かぬ水平線を持つ
この地球を丸い惑星だと承知しています
土佐の高知の桂浜へ行ってごらん
それがよく判ります
潮騒を受けながら素足で砂浜を踏んで立ち
遥かなる　ふくらむ水平線を眺めましょう
青い海　青い空との　龍馬像
ふくらむ彼方に　世界を望む
太平洋のむこう　遠くブラジルでの
ワールドカップ　サッカーを　この六月に
多くのファンが桂浜から応援しました
自然との　人と人との出会いと交流を
体感しよう　それを大切にしましょう
太陽の光を受け　空気と水のある自然の
摂理の中で　動植物の生きる地球という
惑星は　太陽の周りを一年かけて
廻り続けます
それだから　自分の周りを
地球が廻っているなんてことは
少ししか若い時しか思ってはいけません
でも　若さは心身共にいつまでも
保っていけるよう　心がけましょう
そして　地球の健康をこれ以上
そこなわないよう　お互いに気をつけましょう

山紫水明の京都より　Ｋ泰
平成二十六年八月

安岡明夫画伯の「室戸岬」

同窓会名簿をいただいて

丸８回生　吉松　美枝

今年の初め、松の内を過ぎて間もない頃でした。分厚い冊子が届きました。開けてみるとそれは丸の内高校の同窓会会員名簿でした。

ページを繰ると懐かしい名前が次々と目に入ってきます。あ、○○さんは今△△市でお元気でお過ごしなのだ等と嬉しい気分で思い出の世界を彷いました。その一方で既に亡くなられた方々のお名前の中に仲良しグループでいつも一緒だった友の名を見つけて胸が痛みました。卒業後暫く続いた文通もいつの間にか途絶え、連絡もしないままに数十年を過ごしたことが悔やまれ、美しく優しかった彼女の面影を偲んでそっと独り言で話しかけました。

思えば卒業してから間もなく六十年になろうとしています。結婚を機に愛知県の豊田市に移り住んではや五十年。生まれ育った高知に暮らした年月の倍近くをこの地で過ごしたことになります。当地はトヨタ自動車の本拠地とあって、文字通り「くるまの町」です。一家に一台は当たり前、若い現役世代が居る家庭では、一人一台が珍しくないのです。そのため公共の交通機関はあまり便利なようには充実していません。何処へ行くのも車で、ということになり、高齢になった身にはちょっときついなと思うこともあるこの頃です。

高知には墓参を兼ねて年に二～三回帰省します。故郷は何年離れていてもその空気を吸うだけで気持が落ち着きます。そして何より嬉しいのは高知の街では今も路面電車が活躍していることです。モータリゼーションの波が押し寄せた頃、多くの都市で撤去されたようですが、高知では今も現役で街の中心を走っています。この電車を利用すれば市内での大抵の要件は片づきます。丸の内高校へもこの電車で通学しました。グランド前（今は高知城前）で降りてお城を仰ぎ見ながらトコトコ歩いて通ったものです。

街の様子は帰省の度に少しずつ変貌していますが、仰ぎ見る高知城は相変わらず凛として聳え立ち、追手門も昔のままにいかめしく、どっしり構えて迎えてくれます。親友と楽しい話に笑いながら歩いた日々が昨日のことのように思い出されます。

同窓会の会員名簿をめくりながら高知のこと、丸の内高校のこと、旧友のことなどさまざまに思いを馳せることができました。この名簿が手元にあることで、私も高知丸の内高等学校の仲間だとの意識が湧いてきます。

名簿刊行に当たっては大変な作業であったと拝察致します。膨大な資料を緻密に整理され、使い易く機能性に優れた貴重な一冊です。

大いに活用して旧交を温めたいと思います。「同窓会名簿係」の皆様に心からの敬意と、お礼を申し上げます。

ありがとうございました。

卒業記念号　　1956年３月１日

1956. 3. 1　NO.1　THE MARUNOUCHI KOKŌ SHIMBUN　（編集人 田村牧夫　発行人 坂本定恵）　（2）

母校を思う

卒業生　岡　誠子

冬の間厳しい寒さのために打ちひしがれていた草木やその他すべての生あるものが新しい生気をみなぎらせ始め、私がこの学校に席を置いて以来三回目の春がめぐって来ようとしています。今までにも春が訪れる度に、何かしら新しい気持を味わって来たものです。でも、今、私より以前に沢山の人々が感じて来たと同じように、私もまた高校時代最後という複雑な気持を感じなければならなくなって来ました。

今から三年前の春の日に新しい希望を胸に抱いてくぐったこの校門を、今は未知の世界への幾分かの期待と幾分かの不安の入りまじった気持をもって出ようとしています。今、しみじみと高校生活をかえりみる時、自分はこの三年間、一体何をして来たのか、一体何を得て来たのか、考えてみても具体的に何も言えないのです。でも何かしら、大きなものを得たように思うのです。

でも残念なことは、高校生活前半を無益に過して来たことです。今から考えると、自分を自分で無理に束縛して、自分の殻の中に閉じこもっていたのです。すべてに消極的で、ぼんやりと過した私はほんとにつまらなかったと思いますでも私はそういう自分を通して、考えると言うことが如何に大切なことであるか。そして考えて正しいと信じることを周囲のいろんなつまらないことに左右されないでやり抜くということがどんなに難しく自分を幸福にするかということを痛感させられました。でもこうした私にもやはり高校生活の思い出というものが一番大きいのです。そしてその思い出の舞台は常に学校です。

そしてこの学校ー先ず校門の私のいる間に三度も黄金の葉をつけたいちょうの木。毎年夏になると校庭のあちこちもやわらかな桃色の花をひらいたふようなど、その他校庭のいろんな特徴のある草木。その古びた校舎や狭すぎた講堂そして沢山の先生方や友達。こうして次から次へと思い浮べる時卒園ということ、ほんとにつらくなります。でも私達は自然の法則に従って大きくなるとともに、思考によってますます自己を高めねばならないと思います。私に数多くの体験と教訓をもたらしてくれたこの母校をいつまでも心の巣としてますます向上するよう努めたいと考えています。

在校生に

日和崎一郎

何カ月も前から分っているにもかかわらず、卒業は実に突然やって来ます。誰にすぐなんだと知っていてもなかなかそれを信じこめない、そんな気持で私たちは卒業をむかえるのです。そして、目の前にそれをつきつけられてはじめて、少々あわてて気味に来し方を思うのです。後悔の思いでふりかえるのが多いのですが、もうどうにもならないような時期なのです。

皆さんはこんな思いで卒業することのないようにして下さい。何もまとまったものを得たという感じで卒業しなくてもいい、ただ何か満ちたりたという思いで卒業して頂きたいのです。スポーツをしてもいい、ガリ勉をしてもいい、映画に週に八回位通ってもいい、何かやったという気持で卒業できたらと思うのです。

一つの方法として、いや是非すべきこととして、クラブ活動があります。これからは、在校生の皆さん、あなたがたの世界なのです。あなた方が予算を獲得し、あなた方が計画をたて、あなた方がクラブを動かせるのです。そして県体に、あるいは文化祭に、あなた方は誇らしげにあなた方の成果を見せるのです。その間に、もっと大切なことである、人間関係の経験は、これこそかけがえのないものになるでしょう。クラブ活動に参加しないで三年を終ることは大きなものを失うことだということを記憶していて下さい。

私たちは今飛びたとうとしています。もっとすばらしいであろうと疑わない未来をめざしてとびたとうとしています。若さの可能性を信じ、未知数の期待に思いをはせてとびたとうとしているのです。そして今でこそ、こうした自負が許されると思うのです。

やがて私たちがいなくなってその後にみちがえるような丸の内校があなたがたの手によって作られるだろうことを、私たちは疑いません。

僭越ながら左にかのたしにもと思ってペンをおきます。

卒業生に

何でもう飲みにするな　　北川行巳

大きな心持で強く生きること　　柳村久幹

温古知新　　浜口発枝

胸を張んで前へ進もう　　中田四一

純一無雑　　山本克巳

生きることは血みどろになって生活戦線にたゝかうことである　　山崎二郎

ヨクマナビヨクアソベ　　コンドウ

春風をこゝろに　　黒岩

自分をはっきり出して行け　　井上

まず健康　　大山

使命に立って強かれ　　和

卒業の日や寒さはしに白き梅　　牧

思い出は楽しかりけり春は又　　杜

職員

進学生も　大いに張切る

すでに十五名合格

一面所報のように、本年度の就職部は未曾有の好成績を上げているが、進学生達もこれに劣らず張切って努力しているので、多数の合格者を出すことだろうと期待されている。おもな大学について、昨年度の進学状況と本年度の志願者をみると次のようになっている。

	本年度志願者数	昨年度入学者数
高知大	五四	一九

合格決定数次の通り

大学名		合格数
高知女子大	九	二
高知短大	二	三
東京大	二	一
京都大	二	〇
大阪大	八	〇
徳島大	六	一
他の国公立	三三	一
私立大	八九	三二
計	二〇五	七四

神奈川大	三
佐伯栄養	一
名古屋[illegible]	一
京都女大	二
相模女大	四
同志社大	一
東洋大	二
昭和女大	一
立命館大	四

思い出の行事

多彩だった学園祭

年間最大行事の一つである学園祭は、昨秋十月二十八日から十一月四日までの一週間、次のような内容と日程で行われた。

二十八日　大運動会（雨天のため中止、十一月六日再開）
三十一日　映画「女中っ子」「女の園」
一日　舞踊
二日　演劇「夕鶴」
三日　県下高校生弁論大会　シルエット「ワルソーの生残り」「ホフマン物語」「インカの歌」
四日　展示会、バザー、食堂、[illegible]劇「コゼット物語」　音楽会

なお、学園祭運営のため、本年度は職員、生徒会にそれぞれ運営委員会が作られ、総務、資金、会計、生徒管理、接待、文書、衛生、放送、運動会、展示会、芸術祭、バザー、食堂の各係に分れ、職員会は「生徒の自主的運営を尊重して広い学習と教養の場たらしめる」という基本方針に従って助言を与え、生徒会も特に芸術祭に参加する演劇・放送・音楽・レコード・舞踊・映画の各クラブは数回会合してそのあり方を検討したその結果、本年の学園祭には次のような特徴が見られた。

一、運動会と文化祭が、学園祭として統一されたこと

二、従ってポスター、プログラム、照明器具等の作製、経費も、会計のすべても総務会計に統合された。

三、昼間の芸術祭はアッセンブリーとして全生徒が無料で見学することになった。

四、利益金の使途については、職員生徒の運営委員会でそれぞれ話合って定めることとした以上のような運営について反省会では色々の意見があったが、本年度の転換を端緒として将来の歩みに期待がかけられている。

写真　上はシルエット"ホフマン物語"中の一場面・下は国体開会式に入場する女子バレー部

体育部の活躍

本校の体育部も次第に充実向上を示しつゝあるが、本年度も伝統の強みを持つ女子バレー部がすべての県内大会で優勝して全国大会、国体等に代表として出場した外、県内の精鋭とみられているサッカー部は常に県内第二位を確保、全国大会予選には代表となって徳島に遠征し、総合選手権では県内優勝した。バスケットも男子は不運で進出をはゞまれたが実力は第二位にあるとみられており、女子は秋の選手権で二位を獲得、部員は一年が多いので将来が期待される。女子庭球部も全国、四国の大会に本県代表として活躍、新設のバドミントン部は女子は全国、男子は四国大会に出場活躍した。また陸上部の四国大会出場も記憶さるべき成績であったし、その他の各部共来年度の活躍が大いに期待される。

卒業生におねがい

転入学、転就職、住所変更等の場合は、即刻御連絡下さい。

学校
同窓会

全校マラソン

一月二十三日に予定されていた全校マラソンは流感のため三十一日に延期して行われたが、男女共一着は三年の山本明治、山中鶴子の両君だった。成績次の通り

【個人】

（男子）
①山本　明治　31分55秒（三ノ一）
②岩目　明雄（三ノ八）
③山中　和夫（一ノ二）
④久　靖史（一ノ七）
⑤西内　正雄（三ノ二）
⑥三崎　博司（一ノ一）
⑦立元　敏博（二ノ六）

（女子）
①山中　鶴子　25分15秒（三ノ七）
②生馬美和子（一ノ二）
③内田マリ子（一ノ五）
④前田　豊（三ノ四）
⑤和田世紀子（一ノ十一）
⑥大野瑞美子（二ノ二）
⑦小松　勝子（三ノ九）

【団体順位】

	（男子）	（女子）
一位	一ノ六	一ノ六
二位	一ノ二	一ノ五
三位	一ノ七	一ノ四
四位	二ノ八	一ノ十二
五位	一ノ一	一ノ二

祝卒業
各種麺類　日冷・氷特約　心太　製造卸商
門田製麺本店
高知市山田町九二（電話一九八八）

祝卒業
洋酒清酒は
遠山酒店へ
高知市大川筋（電話二三六三）

祝卒業
正木かまぼこ店
高知市越前町一二三（電話呼出し三七五六）

祝卒業
製造販売卸小売
ソフトクリーム　大　三〇円
アイスモナカ　一〇円
アイスヨーカン　一〇円
アイスマンジュウ　一〇円
クリームケーキ　一五円
御来店を乞う
徳屋食堂
高知市西紺屋2（電 3822）

祝卒業
福田製麺所
北奉公人町四丁目（電話一七一七番）

祝卒業
有限会社　西村製パン所
高知市菜園場町二一七（電話一七六七番）

学校関連ニュース

高知新聞

県出版文化賞決まる

「ちびた鉛筆」「花開く蓮」

寺田寅彦賞は該当なし

「第60回県出版文化賞」の受賞作が5日発表され、故・苅谷たかし（本名＝小笠原寛志）さんの「苅谷たかし川柳遺句集　ちびた鉛筆」（小笠原登さん発行）と、埼玉県坂戸市、山崎波浪さんの歌集「花開く蓮（はす）」（高知歌人社）が選ばれた。特別賞は1点。「第35回寺田寅彦記念賞」の該当作はなかった。

2015年度に県内で発行された出版物などが対象で、県文教協会が選定。出版文化賞は千浦孝雄・元高知市民図書館館長ら5人の選考委員が、12点の応募作から選んだ。

「第60回県出版文化賞」の受賞作と特別賞

「ちびた鉛筆」は作者の没後に残された川柳の句帳から、日常の一部を切り取った1200句を次男の小笠原望さん＝四万十市＝が9年がかりで選び、長男の登さん＝土佐市＝が発行した。「花開く蓮」は病気で視力を失った作者が四季折々の風物や生活の風景、社会事象を情感豊かに詠んだ歌集。特別賞の「いの町史」は3編から成り、伊野、吾北、本川各地区の歴史を再構成。カラー写真や図版を多用し、分かりやすく編集した。

寺田賞は鈴木堯士・高知大学名誉教授ら5人の選考委員が応募作2点を選考。該当作なしとした。

授賞式は椋庵文学賞とともに20日午後1時から、高知市本町4丁目の県文教会館で行われる。

（徳澄裕子）

高知新聞

ソフトボールが紡ぐ未来

「母親」監督の思い

合同中初Vから10年 5

尾川・黒岩・佐川の挑戦

「遊ばれゆうよ、ボールに！」「1歩目が悪い。もっと、前に出んか」

―「尾川・黒岩・佐川」合同チームのメンバーを叱咤（しった）激励しながら、ノックバットを振るうのは、尾川中教諭で、監督の大原留美（48）だ。男子チームを率いる女性監督は珍しいが、大原は高校時代、学生日本代表に選ばれたソフトボール選手。トップレベルの指導術で、子どもたちを教えている。

ノックをする大原留美。「減量で飛ばなくなったので、筋トレをし直しました」という（佐川町本郷耕）

■負けず嫌い

丸の内高からソフトボールの監督や野球部の部長などをしていた。

当時、本県女子ソフトの実力は「四国4番手」。

一度、後にしたソフトの世界に再び引き戻されたのは、2006年の全国中学校体育大会（全中）だ。本県がソフト開催地となり、スタッフとして駆り出された後、気付けば愛宕中で女子の指導を引き受けていた。

始め、中京大学でも競技を続けた大原は、実業団の誘いを断り、故郷で教職に就いた。「基本的に大学でソフトは終わり」と指導現場から離れ、バレー部の監督や野球部の部長などをしていた。

当時、本県女子ソフトの実力は「四国4番手」。

一度、競技の世界にのめり込めば、負けず嫌いの性格が奮い立った。県女子中学代表の指導も任され、厳しい練習で、全国に駆け出された後、気でも戦えるチームに育て上げた。

■「5キロ」の約束

12年、尾川中に赴任し、その年の秋から、指導を託された。2人の子を持つ大原は、時に「母性」も意識したという。さまざまな心配りをしながら、選手の気持ちをつかむよう心掛けている。

保護者の一人は「親よりも大原先生の指導の方が『絶対』です」と笑う。ある時、家で子どもが親のスマートフォンでゲームに興じていると、いきなり、居ずまいを正した。理由は「大原先生からの着信」。子どもは親におずおずとスマホを差し出したという。

大原は尾川の子どもに感謝していることもあるという。ソフト好きな子どもたちのおかげで「指導観」が変わったのだ。

「今まで自分の指導に合わせようとしていたが、生徒目線に立つことの大切さが分かった」

選手自らの判断でプレーできるように、フリー打撃では場面を想定し、強攻か、バントか、どんな打球を打つかなどを選手に任せる。問題点があれば、その場で指導する。素直な子どもたちに出会えたからこそ、できる練習でもある。

今年、大原は選手たちとある約束をした。それは自身の「5キロ減量」。全中最後の試合で勝利を収めた暁に、生徒たちの手で、宙に舞ってもらうためだ。既にそのノルマは達成したという大原。「10回は上げてくれるがでねえ」と笑顔でメンバーに語り掛けた。

＝文中敬称略

（佐川支局・吉川博之）

平成28年２月６日付▶

高知新聞

特殊詐欺の防止を目指し、県警がミレービスケットとコラボした「ミやぶレー」が約１年で約４万セット売れたとして、製造する野村煎豆加工店（高知市大津乙）が２日、売上高の１％に当たる５万６千円を四国４県の防犯協会に寄付した。４県の方言で語り掛けるバージョンもでき、高知発の〝おいしい〟啓発商品になっている。（山崎友裕）

特殊詐欺を「ミやぶレー」

高知市の菓子会社製造

発売１年で４万セット

被害減 日本一に貢献

四国４県で販売されている「ミやぶレービスケット」（高知市の野村煎豆加工店）

ミやぶレーは高知東署の巡査部長、大崎由紀さん（33）が一昨年の秋ごろ発案した。

「完全な思いつき。上司に話すのも恥ずかしかった」と振り返る通り、上司も「できるかえ？」と懐疑的だったが、同社の野村有弘専務は「ぜひやりましょう」と即断した。昨年３月、30グラム入りを４袋つなげたミやぶレーが発売された。

「宝くじの『当選番号教えます』は詐欺ですよ」「電話で『もうかる話』は詐欺やきね」。袋には大崎さんらが知恵を絞り、詐欺の手口を目に入りやすいデザインで紹介。同10月からは「だまされたらあかんじょ」「だまされんぞなもし」などと四国４県の方言バージョンも加わった。

同社によると、今年３月までの１年間で、県警が啓発イベント用に購入したものも含め四国内で約570万円売れた。

高知県内の2015年の特殊詐欺の被害件数は前年比25件減の53件、被害額も約４億４千万円減の約１億２７００万円で、減少率はいずれも全国トップに。県警生活安全企画課は「買い物客らの目に触れる機会が増え、被害防止にも役立ったのでは」と見る。

贈呈式は県警本部で行われ、野村専務らから現金を受け取った県防犯協会の谷脇彰専務理事は「市民の安全のために使います」と謝辞を述べた。同社は今後も寄付を続けるという。

▲平成28年５月３日付

平成28年８月18日付▶

（高知新聞社より掲載許可済）

平成28年度同窓会役員名簿

会長	戸田　隆	丸11回
副会長	飯田　正	丸6回
〃	福井　和子	丸8回
〃	浜田　拓	丸13回
〃	長野　道夫	丸15回
事務局長	小笠原泰英	丸17回
〃	中内　啓二	丸12回
事務局次長	橋本　博子	丸25回
〃	谷山　紗栄	第50回
理事	和田　隆子	第51回
〃	矢野　淑子	第53回
〃	中屋　辰子	第54回
〃	大平　和栄	丸1回
〃	畑山　育子	丸1回
〃	山下須美子	丸1回
〃	伊藤　明子	丸2回
〃	窪田　一郎	丸2回
〃	堀　博亮	丸2回
〃	山本　忠智	丸2回
〃	中川　功	丸3回
〃	藤原　健裕	丸3回
〃	橋田　裕之	丸4回
〃	横田　昌之	丸4回
〃	澤田　輝夫	丸5回
〃	橘　環	丸5回
〃	明坂　守隆	丸5回
〃	永野美奈子	丸6回
〃	渋谷　俊昭	丸7回
〃	土居　稔	丸7回
〃	西野　愛子	丸7回
〃	松木　健信	丸7回
〃	池　紀子	丸8回
〃	國松　勝	丸8回
〃	福島寿美栄	丸8回
〃	島村　三省	丸9回
〃	久保　衛	丸9回
〃	森本　忠彦	丸9回
〃	山本　幸廷	丸10回
〃	入交　征章	丸11回
〃	長田　紘一郎	丸11回
〃	博田　俊一	丸11回
〃	堀部　興紀	丸11回
〃	小坂　英敏	丸12回
〃	野村　三郎	丸12回
〃	岡村　健彦	丸13回
〃	森本　晴郎	丸13回
〃	加藤　奉良	丸14回
〃	河村　幸恵	丸14回
〃	脇　久子	丸14回
〃	恒石　節子	丸15回
〃	中内　豊治	丸15回
〃	井上　三郎	丸16回
〃	近藤　泰清	丸16回
〃	比江森信子	丸16回
〃	山崎　修身	丸17回
〃	谷岡　三枝	丸20回
〃	近森　裕子	丸20回
〃	竹倉　美智	丸22回
〃	笠原　和子	丸25回
〃	豊永　輝子	丸25回
〃	江野ゆかり	丸26回
広報委員長	西山　和美	丸31回
広報委員	中越　和代	丸26回
〃	徳弘　千鶴	丸26回
〃	公文　富子	丸30回
〃	大井　直美	丸31回
〃	長岡早百合	丸36回
〃	細美　香代	丸31回
会計	川渕　康生	丸13回
〃	中村　光一	丸17回
会計監査	田村　真智	丸28回
〃	吉本　宏	丸1回
学校事務局	田中　公夫	丸8回
関東支部長	松岡　悦子	丸18回
世話人代表	横川　浩憲	丸12回
世話人副代表	小松　正一	丸14回
世話人	中山　澄江	丸20回
〃	小林　夫美	丸23回
〃	榎本　歓子	丸26回
〃	石本　佳世	丸20回
会計	杉本　泰男	丸3回
関西支部長	武樋　宗一	丸7回
世話人代表	坂本　周一	丸8回
世話人	三嶋　香代	丸11回
〃	長沢　義喜	丸12回
会計	佐々木朋子	丸12回

執筆者

【高知】
戸田　隆
本川　博幸
松崎　淳子
川井　淑子
中内　啓二
西村　結

【関東】
田中　公夫
岡井　盛夫
松岡　悦子
南雲　和枝
小嶋　啓子
石本　佳世
山本　晃平
山崎　波浪

【関西】
杉本　泰男
吉松　美枝

あとがき

今年の夏は、猛暑続きで、高知でも体温より気温が高いところもあり、温暖化してきているのではないかと思っております。

さて、丸の内高校も百三十周年を迎えます。明治・大正・昭和・平成と激動の時代を乗り越え、脈々と歴史を刻み、また、時代に合わせた改革がなされ、現在に至っております。今回の公孫樹は、高知第一高等女学校から、平成に入ってからの男女共学時代の高知丸の内高等学校卒業生という構成で編集しております。

同窓会事務局には、みなさんの活躍が耳に入ってきます。そんな中で感じることは、年齢を重ねても前向きであるということ、生きがいがあるということです。「はたして私は？」と思うことも度々あります。そんな中で、学問ではない、生き方・価値観を学ぶことができることは、「事務局の役員の役得かなぁ」と思っています。また、同窓生は、いいものです。自分を飾らなくていい、ありのままの姿でいられるということです。それは、時が経つにつれ、より感じるような気がします。みなさんもぜひ同窓会に足を運んでいただけたらと思っています。

（編集長　西山　和美）